福井県中高一貫教育検証委員会

報　告　書

令和３年８月２７日

福井県中高一貫教育検証委員会

目　次

Ⅰ　中高一貫教育の検証に当たって

１　本県の中高一貫教育の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１

２　今回の検証の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１

Ⅱ　併設型中高一貫教育校の現状と課題

１　地域社会、国際社会のリーダーとなる高い学力と豊かな人間性・・・・・・・　２

２　ふるさと福井への深い知識と大きな誇り・・・・・・・・・・・・・・・・・・　７

３　世界に通用する語学力と国際感覚・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１

４　全国の併設型中高一貫教育の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３

Ⅲ　連携型中高一貫教育校の現状と課題

１　あわら地域（金津高校、金津中学校、芦原中学校）・・・・・・・・・・・・・　１５

２　越前地域（丹生高校、朝日中学校、宮崎中学校、越前中学校、織田中学校）・　１７

３　美浜・若狭地域（美方高校、美浜中学校、三方中学校、上中中学校）・・・・　１９

４　県教育委員会の支援・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２１

Ⅳ　福井県の中高一貫教育の充実に向けた提言

１　併設型中高一貫教育について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２２

２　連携型中高一貫教育について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６

Ⅴ　提言の実現に向けて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２９

【参考資料】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３０

Ⅰ　中高一貫教育の検証に当たって

１　本県の中高一貫教育の経緯

本県においては、中高一貫教育推進検討委員会から平成１５年１１月に「福井県における新たな中高一貫教育の実施について」という報告書が公表され、平成１７年４月から、あわら地域、朝日地域および三方・美浜地域において、「市町立の中学校の一部のクラスを連携先の高校にスライドさせる」という本県独自の連携型中高一貫教育を実施している。

その後、平成２５年１月に福井県立高等学校改革検討委員会から「福井県における中高一貫教育の推進について～併設型中高一貫教育の導入等に関する議論のまとめ～」が提言され、平成２５年３月に「福井県における中高一貫教育校（附属中学校併設）の設置方針」を策定した。平成２６年４月に高志中学校を設置し、平成２７年４月に第１期生を受け入れている。

２　今回の検証の目的

令和３年３月に６年間の中高一貫教育を受けた高志中学校の一期生が高志高校を卒業した。併設型中高一貫教育校は、６年間の継続した指導の中で、効果的に生徒の個性や創造性を伸ばし、才能を発見し、社会性や人間性を育むことを目的に導入されたシステムである。開校後６年が経過したことから、その成果や課題を検証していく。

また、令和２年６月に福井県高等学校教育問題協議会（以下「高問協」という）から「今後の県立高等学校の魅力化の方策について」が答申され、その中で連携型中高一貫教育校についても成果や課題、地域の実情等を考慮して今後の中高連携のあり方を検討していくことが望ましいとの指摘を受けた。

少子化による生徒数の減少や私立高校の授業料無償化等もあり、県立高校のさらなる魅力化は避けては通れない課題である。また、新型コロナウイルス感染症拡大を機に、県立高校の全ての生徒にタブレットが導入されており、学校のＩＣＴ化、教育のＤＸの加速化など本県教育を取り巻く環境は大きな変革期にある。

この検証委員会は、８月までに３回の会議を開催し、併設型中高一貫教育については、高志中学校の教育目標である①地域社会、国際社会のリーダーとなる高い学力と豊かな人間性の育成、②ふるさと福井への深い知識と大きな誇りの涵養、③世界に通用する語学力と国際感覚の育成について、現状と課題を検証するとともに、連携型中高一貫教育については、各地域の目指すべき生徒像や現状と課題を踏まえ、中学校・高校の計画的・継続的な指導について検証する。

Ⅱ　併設型中高一貫教育校の現状と課題

１　地域社会、国際社会のリーダーとなる高い学力と豊かな人間性

高志中学校では、市町立中学校より多くの授業を実施し、数学や理科では高校の学習内容を先取りした学習に取り組んでいる。高志高校では、大学合格に向けて、多様な選択肢の中から必要な科目を選択する進学型単位制を導入している。学校行事や生徒会活動は中１から高３という幅広い年齢集団で生徒の自主的な運営がなされている。

（１）高志中学校のこれまでの取組み

①　授業時数の増加、高校課程の先行履修

高志中学校では、１、２年次に週２日、３年次に週３日、７限授業を実施している。これにより、標準授業時数（学校教育法施行規則第 73 条）と比較して、３年間で合計３５０時間多い授業を行っている。

数学は標準時数より１４０時間多く、１、２年次で中学校３年間の内容を学習し、３年次には高校「数学Ⅰ」の学習（週５時間）を行い、「理科」は標準時数より７０時間多く、３年次に高校「生物基礎」の学習（週２時間）を行っている。

②　土曜活用授業

中高一貫教育校等の実績があり、生徒の学習意欲を喚起するハイレベルな授業を展開できる県外の教員（スーパーティーチャー）を招聘し、「土曜活用授業」を行っている。

各学年とも、それぞれ２名のスーパーティーチャーが年２回（前期・後期各１回、土曜日の午前中)、授業を実施している。

【スーパーティーチャーによる「土曜活用授業」】

所属等（令和２年度）
元小石川中等教育学校教務主任　（数学）
元洛南高校進路部長（数学）
開成中学高校教諭　（数学）
元筑波大学附属駒場高校副校長　（物理）
筑波大学附属駒場高校教諭　（物理）
灘中学高校教諭　（数学）

③　特別活動（学校行事、部活動、生徒会活動）

ア　学校祭

高校と合同で実施している文化祭では、中学生によるステージ発表（ミュージカル）が開校初年度から行われており、恒例行事となっている。教室展示では、「高志学」の課題発表に関するポスター展示など高志中学校の特色ある取組みが行われて

いる。体育祭でも、高校生と合同で応援合戦を行ったり競技に参加したりしている。令和２年度は、中学生による新たな企画「集団演技」が実施された。

イ　部活動

健康でたくましい心身と豊かな人間性の育成を目標に、８つの運動部（うち２つは令和３年度１年生から募集停止）と４つの文化部（いずれも令和３年４月現在）を設置している。活動時間は、平日は１７時４５分まで（火曜日は休養日。土・日のうちの１日は原則として休養日）で、限られた時間を有効に活用して活動している。文化部は原則として高校と合同で実施しており、運動部についても弓道や剣道など合同で行うものがある。活動の時間や場所を高校と調整しながら、活発な部活動を行っている。また、３年次の１２月からは、希望すれば高校の部活動に参加できる「高校仮入部」制を実施している。

ウ　生徒会活動

高校とは別の生徒会組織が作られており、生徒会新聞の作成や交流活動の実施など積極的に活動している。高校生徒会と合同で活動する場も設定されており、学校生活や学校行事等の在り方等について話し合いなどを設けている。令和２年度は、読書や音楽会、留学体験発表会など生徒が学校生活において自由に使える時間を確保するため、週に１回の「掃除をしない日」を新設したり、学校説明会で小学生への説明を行ったり、１年から３年生が参加する「高志交流祭」を企画・運営したりするなど、生徒会が中心となって活動の幅を拡げている。

④　学校外の活動のサポート

高志中学校には、学校外でスポーツ活動や文化的活動等を行う生徒が学年ごとに数名いる。これらの生徒には、校外活動が円滑に行われるよう部活動等の活動時間を、個人に応じて柔軟に調整するなどの配慮をしてきた。令和３年度からは、これまでの「全員入部制」を解き、校外での活動をより一層容認・奨励する体制とした。

（２）高志高校のこれまでの取組み

①　進学型単位制教育課程

平成３０年度入学生から、大学合格に向けて、多様な選択肢の中から、自分の進路実現のために必要な科目を選択できる「進学型単位制教育課程」を実施しており、高校３年次に２０単位以上の「選択科目群」の中から志望進路に応じた科目を選択できる。また、前期・後期だけで単位を認定できる科目も設けている。１日７時間授業を５日間実施しており、週当たりの授業時数は３５時間である。

ＳＳＨの研究指定に伴う英語の学校設定科目（英語活用ＡＥ（Advanced Expression）等）のほか、進学型単位制教育課程を特色づける多彩な学校設定科目（演習生物、論文演

習等）を設けている。

（３）高志高校・高志中学校の課題等

［成果］

①　教科学力（学力推移調査より）

全国の公立・私立中高一貫教育校の多くが受験している「学力推移調査」を、高志中学校では、各学年において年２回（４月と１０月、１年の４月は国語・数学の２教科（令和３年度は英語含む)、他は国語・数学・英語の３教科）受験し、各生徒の教科別の学力や学習状況を把握するとともに、全国の受験校との比較を行っている。平均点による全国順位は、受験校の数が毎回異なるので単純比較はできないが、全国の上位レベルに位置している。

【「学力推移調査」全国順位（推定値）〈３教科総合〉】

	中学１年 ４月	中学１年 10 月	中学２年 ４月	中学２年 10 月	中学３年 ４月	中学３年 10 月
１期生	90	47	36	13	12	9
２期生	107	28	58	33	45	35
３期生	65	18	28	9	13	8
４期生	94	23	24	9	10	18
５期生	104	23	15	33		
６期生	65	36				

※令和２年度４月（４期生３年次、５期生２年次、６期生１年次）は６月に実施

※全国参加校 550 校～600 校

②　理数の資質・能力（科学の甲子園ジュニア、ふくい理数グランプリ）

「科学の甲子園ジュニア」は、国立研究開発法人科学技術振興機構が、未知の分野に挑戦する探究心や創造性に優れた人材を育成することを目的として創設した大会で、全国の中学生が都道府県を代表して科学の思考力・技能を競っている。高志中学校生は、平成２８年度から令和２年度まで福井県代表として出場しており、令和２年度はエキシビション大会総合１０位に入るなどの優れた成績を残している。

「ふくい理数グランプリ」は、中学・高校生の科学的な思考力・判断力・表現力を育成することを目的として、福井県教育委員会が平成２０年度から開催している。３人のチームで、数学や理科の課題を解決する実技競技と、解決までの思考過程を発表するプレゼンテーションで順位が決定される。高志中学校生は平成２８年度以降出場しており、数学部門や理科部門で最優秀賞等を収めている。

「科学の甲子園ジュニア」「ふくい理数グランプリ」のほかにも、様々な理数系のコンテスト等が県内外で行われており、日本ジュニア数学オリンピック甲信越・北陸地区優秀

賞などの成績を収めている（詳細は参考資料No５参照）。

③　令和３年３月高志高校卒業生の進路状況

令和３年度大学入試において、大学入学共通テストが初めて導入された。国語と数学の記述式問題、英語の民間試験活用、電子調査書の導入など様々な案が取りやめとなるなど混乱が続いた。また、新型コロナウイルス感染症が拡大し、大学入試が予定どおり実施できるか心配された年でもあった。

高志中学校１期生を含む３年生２４５名は、大学入学共通テスト直前に、大雪による臨時休業にも見舞われたが、それらの困難にもめげず果敢に高い志望を貫き、近年に比して難関大学の合格実績を大きく伸ばす成果を上げた。

【高志高校の合格実績】

		Ｈ３０入試	Ｒ１入試	Ｒ２入試	Ｒ３入試
３年生生徒数		297	258	266	245
	内、国公立大学合格者数	211	184	196	179
	東京大学	1	3	1	10
	京都大学	1	2	3	4
	大阪大学	6	5	3	9

（詳細は参考資料No６参照）

［課題］

①　併設型中高一貫教育の趣旨を踏まえた学級編成

高志高校では、中学校から入学する生徒（高志高校の場合は「内進生」という）と高校入学者選抜を経て入学する生徒（高志高校の場合は「高入生」という）を高校２年までは別学級編成とし、３年次に志望大学に応じた文理別の類型に分ける混合の学級編成をとっている。体育や芸術では、１年次から内進生と高入生が混在する講座で授業を行っている。高入生の卒業生アンケートによると、「内進生と高入生の交流がもっとあると思っていた」との回答が４割となっている。また内進生の５割、高入生の３割が早期の混合クラスを望んでいた。

また、令和３年３月の卒業式において卒業生代表が「高入生と内進生といった枠を越えて縦のつながり、横のつながりを重視して「高志」として一つになってこそ、よりよい学校になるはずです」と答辞で述べている。

併設型の大きな特徴は、内進生と高入生が、学習や学校行事、部活動等で切磋琢磨・交流を深めるところにあるので、学級編成の在り方を再検討する必要がある。

②　中学校における高校課程の先行履修

数学においては、中学２年次までに中学校３年間の「数学」の学習を終え、中学３年次に高校の「数学Ⅰ」を履修しているが、授業についていけず、理解・定着が十分でない生徒が一定数いる。高校１年次に「数学Ⅱ」から始める教育課程は、数学を得意とする生徒にとっては早期に学習を終了できるという利点がある一方で、得意でない生徒にとっては進級が危ぶまれたり進路選択の幅が狭まったりするなど、学校生活や将来の進路に支障が出ているケースもある。このような状況に対して、令和２年度から中学３年次の数学を習熟度別講座で実施しているが、一定の効果は見られてはいるものの、根本的な解決には至っていない。上位から下位までのすべての生徒にとって効果の上がる学習の在り方を検討する必要がある。

理科においては、「生物基礎」を先行履修しているが、中学生の興味関心は多岐にわたることから、中学３年次には物理や化学も含めた発展学習の再検討が望まれる。

２　ふるさと福井への深い知識と大きな誇り

高志高校・中学校では「ふるさと福井」に対する誇りとグローバルな視野を持って新たな分野に挑戦し、社会を変革していく人材を６年間で育成するプログラムを実施している。高校では、国のスーパー・サイエンス・ハイスクール事業等を活用した特色ある教育活動に取り組んでいる。

（１）高志中学校のこれまでの取組み

①　「高志学」の設置

「『ふるさと福井』に誇りを持ち、グローバルな視点を持ったイノベーターの育成」を目標に、６年間を見通した「総合的な学習の時間」の取組みを実践しようと、「高志学」が設定された。高志中学校における「高志学」は、「ふるさと学習プログラム」「キャリア教育プログラム」「課題探究プログラム」の３本柱で成り立っている。それぞれの概要は、次のとおりである（詳細は参考資料 No７参照）。

ア　ふるさと学習プログラム

県内の博物館等を訪問したり県内の伝統工芸士から学んだりして、自分が育った「ふるさと福井」について、調査・取材等を行い、その魅力や課題等を学習する。

イ　キャリア教育プログラム

新しい時代のリーダーとして活躍することを念頭に、県内の企業経営者等の講義を受けたりインターンシップを体験したりして、福井の産業や働くことについて学習する。

ウ　課題探究プログラム

社会を変革するために必要な問題発見力、課題解決力、提案力などを身に付けるため、「福井のより良い将来」をテーマに探究し、提言等を論文にまとめたり発表したりする。

②　嶺南研修、東京研修、シンガポール研修

「高志学」の学習に資するため、各学年で様々な校外研修を行っている。宿泊を伴う活動としては、嶺南研修（１年次）、東京研修（２年次）、シンガポール研修（３年次）があり、学年が進むにつれて県内から世界へと生徒の目が外に向くようになっている。

嶺南研修は、クラス・学年の親睦を深めることや、集団行動のルール・マナーを学ぶとともに、年縞博物館や若狭三方縄文博物館等を訪れ、福井県の自然・文化・生活等について学習する機会としている。

東京研修では、１、２年次のふるさと学習やキャリア教育から学んだこと、見つけた課題について考えたことなどを福井県出身で東京在住の企業人らと話し合う「福異人研修」を行う。「福異人研修」では、自分の力で新しい道を切り開いた方々から時代の先を

見る目やリーダーとしての資質などを学ぶことに加え、「外から見た『ふるさと福井』」という視点からも学習する。このほか、卒業後の大学生活についてイメージする機会を持つため、東京大学等の大学を訪問している。

シンガポール研修では、現地の国立大学や大学付属理数中学校を訪問し、英語での授業や現地の中高生との交流等を行ったりしており、海外の文化をじかに体験し視野を広げ、海外から見た日本・福井について考えるとともに、それまでに学習した英語の力を試す絶好の機会となっている。

③　学校独自の科目の設置

高志中学校の２年次後半には、自然・食・伝統工芸・産業・観光・交通などの分野に関する探究テーマを設定し、文献調査やフィールドワーク等を行い、中学３年次には、学校設定教科の「論文基礎」を設け、アイデアの創り方や情報収集の方法など論文作成に必要な知識・技能を習得し、「ふるさと福井をより良くするための提案」を約８，０００字の論文にまとめている。

（２）高志高校のこれまでの取組み

①　スーパー・サイエンス・ハイスクール（ＳＳＨ）およびスーパー・グローバル・ハイスクール（ＳＧＨ）

高志高校は、平成１５年度に、福井県で最も早くスーパー・サイエンス・ハイスクール（ＳＳＨ）に指定された。令和３年度で、第４期の４年目（通算１９年目）を迎えている。各指定期間の取組みの概要は、次のとおりである。

第１期～第２期：理数科教育課程の研究開発
　　海外科学研修、科学英語の実践、英語での研究発表を実施
第３期：普通科の生徒にも対象を拡大
第４期：コアテーマ型課題研究、全校体制による指導
　　３年間持ち上がりのメンター指導等

生徒は、「物質・エネルギー・システム」「環境（自然・人間・社会）」「生物・生命」「数理・情報」の４つの研究領域内で、福井に根ざした解決すべき中心的課題（コア）を設定し、「探究の手引き」等に基づき、複数のグループで幅広い視点から研究を行っている。また、米国・ニュージャージー州のニュープロビデンス高校の生徒とのホームステイや研究発表、授業体験を含む交流活動を行っている。

高志中学校で学んだ生徒が高志高校に入学して以降、学会発表や各種コンテストに参加する形で、課題研究の成果をアウトプットする生徒が増えてきている。

平成２６～３０年度には、ＳＧＨに指定され、東京大学、京都大学大学院、福井経済同友会等と連携して、グローバルな課題研究に取り組んだ。文部科学省は、平成３１年度からＳＧＨの後継事業であるワールド・ワイド・ラーニング（WWＬ）を始めており、高志高校は金沢大学附属高等学校を拠点とする北陸３県のWWＬの連携校として参加している。また、令和３年度から文部科学省が始めた「ＳＧＨネットワーク」に参画し、全国高校生フォーラムに参加するなど国内外の高校生と切磋琢磨する課外活動を充実させている。

②　課題研究発表会

毎年２月上旬に実施している高校２年生の「ＳＳＨ課題研究発表会」を、高校・中学校の教員、生徒に公開している。分野別に口頭発表を行う分科会と、体育館を会場に行うポスターセッションの２部構成を取っている。ポスターセッションには、高志中学校生も参加している。

平成２２年度からＳＳＨ指定校をはじめ県内各高校、中学校の生徒に発表の機会を提供する「福井県合同課題研究発表会」を主催している。令和元年度は県内外の１３校が参加し、口頭発表４０件、ポスター発表８７件となり、過去最大規模となった。

③　選択型研修旅行

平成２８年度から、従来の沖縄修学旅行に代えて、２年生が１０月中旬に「選択型研修旅行」を実施している。海外８コース、国内２コースから、生徒が研修先を選択して参加している。

どのコースを選んでも、大学研修、企業・博物館等研修、現地の大学生、高校生との交流、課題研究の中間発表・情報収集等を体験できるよう計画を工夫している。

令和元年度のコースは、次のとおりであった。

【サイエンス研修】アメリカ東海岸、アメリカ西海岸、マレーシア、シンガポール、オーストラリア、国内（首都圏）

【グローバル研修】タイ、ベトナム、オーストラリア、国内（首都圏）

（３）高志高校・高志中学校の課題等

［成果］

①　探究の資質・能力

高志中学校生は「高志学」（総合的な学習の時間）の活動を通して、探究者として必要な「様々な角度から情報を得て理解を深めようとする態度」や「批判的思考を持って物事を追究しようとする態度」など基本的な態度を身に付けている。また、「文章や資料等を理解する力」や「データ等を分析する力」など「思考・判断・表現」の力も身に付けている。さらに、卒業生アンケートによると、９割以上がふるさとへの誇り、グローバルな視野・チャレンジ精神を高めるのに役立ったと回答している。

［課題］

① 自然科学系の探究型学習の強化

高志高校は１９年の長きにわたってＳＳＨに継続して指定されており、必履修の「総合的な学習の時間」「社会と情報」に替えて課題研究「ＫｏＡ」を設定するなど、教育課程の特例措置を適用しているほか、実験器具や消耗品を整備し、外部講師を招聘した教育活動を行っている。

一方、高志高校はＳＳＨ校でありながら、生徒の課題研究テーマとして「まちづくり」「交通」「観光」など社会科学系の分野が選定される傾向がある。そのため、中学校段階から自然科学系の分野においても生徒が興味関心に沿った自由度の高い課題研究に取り組める環境を用意していく必要がある。

また、高志中学校は、理数系の授業時数の増、理科実験の充実等を学校の特長として掲げているが、中学生が化学実験室で理科実験を実施しようとしても、高校生の化学の実験と重なり、実験ができないという状況が生まれている。

３　世界に通用する語学力と国際感覚

外国人教師の単独指導など高志中学校独自の英語教育を実践し、世界に通用する語学力を身に付けている。高校でも引き続き４技能（「読む」「書く」「聞く」「話す」）を総合的に身に付ける継続した英語教育に取り組んでいる。

（１）高志中学校のこれまでの取組み

①　週３時間のネイティブ教員による英語教育

全学年において、授業は「英語表現基礎」が週１時間、通常の「英語」が週４時間ある。「英語表現基礎」は外国人教師が単独で行うもので、全て英語で行われる。通常の「英語」のうち２時間は日本人教師とＡＬＴとのティームティーチングで実践的に英語を使用する授業である。暗記や文法理解といった学習にのみ焦点が当てられるのではなく、発表や英語でのやり取りなど、英語を用いることに主眼が置かれた活動が多く行われている。

②　語学力を高める課外活動

朝８時５分からの朝活動で、ＮＨＫラジオ『基礎英語』を用いて英語の学習を行っている。学年ごとにレベルを分けて使い、目的や場面に応じた表現の学習やリスニング・スピーキング等の練習を行う。また、英語教員やＡＬＴが、英語ディベートや英検受験に向けた生徒支援を行っている。

（２）高志高校のこれまでの取組み

①　英語コミュニケーション能力の育成

ＳＳＨの研究指定に伴い、英語の学校設定科目「英語活用ＡＥ(Advanced Expression)」「英語活用ＢＥ（Basic Expression)」「英語活用ＤＤ（Debate & Discussion)」「英語活用ＲＰ（Research & Presentation)」「英語表現ＣＷ（Change the World)」を開設し、その中で、社会問題や時事問題を取り上げた授業、ＡＬＴとのティームティーチング、プレゼンテーション、ディベートなど英語４技能を総合的に伸ばす指導を行っている。全学年でＧＴＥＣ（スコア型英語４技能検定）を定期的に実施し、生徒の英語力の変容を把握している。

②　海外留学の奨励

ＳＧＨに指定された平成２６年度以降、海外留学を積極的に奨励している。文部科学省「トビタテ！留学ＪＡＰＡＮ」で留学した生徒、民間保険会社の留学支援を活用して留学した生徒など多くの生徒が短期の海外留学を行った。１年間の長期留学を行った生徒

もいた。令和２年度は、新型コロナウイルス感染症拡大のため、留学プログラムが一斉に停止した。

（３）高志高校・高志中学校の成果

①　英語の資質・能力（英語検定）

高志中学校の朝活動での英語学習、外国人教師による単独授業「英語表現基礎」、コミュニケーション能力の育成に焦点を当てた授業を行った結果、生徒の英語力は確実に伸びている。このことは、英語検定の結果からも伺い知ることができる。生徒には「３年終了時までに英検準２級取得」を目標に英語学習に取り組ませている。

１～３期生では２級のみならず準１級の合格者も出ており、３期生においては「卒業までに準２級以上」の目標に全員が到達した（詳細は参考資料No８参照）。

【高志中学校　３年生の英検取得状況】　（人）

	Ｈ３０（２期生）	Ｒ１（３期生）	Ｒ２（４期生）
準１級	3	4	0
２級	44	46	28
準２級	37	40	54
準２級以上	84	90	82

②　英語ディベート大会

高志中学校では、英語ディベート大会に向けて、希望する生徒が放課後などの時間を利用して活動している。１期生のうちの６名が、３年次（平成２９年度）に出場した全国大会団体では３位となった。高志中学校の１期生が中心メンバーだったチームは、令和元年度「全国高校生ディベート大会」に出場し、団体の部で準優勝を勝ち取った。また、個人の部でも、優秀ディベーター賞を獲得した。

③　海外留学等

文部科学省の制度など様々な留学プログラムを活用して数週間の短期留学や１年間の長期留学のほか、海外の大学進学を行う生徒がいる。

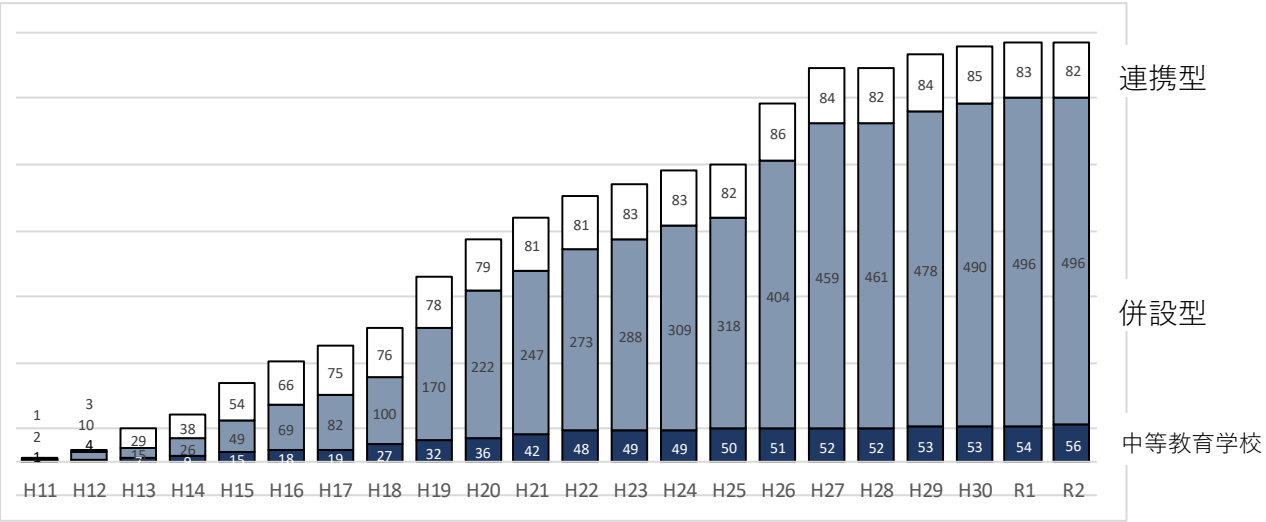
【高志高校の海外留学等の状況】　（人）

年度	Ｈ２６	Ｈ２７	Ｈ２８	Ｈ２９	Ｈ３０	Ｒ１	計
短期留学	15	17	17	16	14	14	93
長期留学				1		3	4
海外大学進学		1		1	1	1	4

４　全国の併設型中高一貫教育の状況

中高一貫教育制度は、これまでの中学校・高校教育に加えて、生徒や保護者が中高一貫教育も選択できるようにすることにより、中等教育の一層の多様化を図るため、国は平成１１年４月から制度化している。制度化されて以降は併設型が大きく設置数を伸ばしている。

【全国の中高一貫教育校の推移】



（文部科学省　学校基本調査）

【参考】全国の中高一貫教育の取組み例

京都市立西京高等学校

全てのクラスが専門学科（エンタープライジング科）の高校である。現在は２年次から内進生と高入生の混合クラスとしている。社会を読み思考する力を養うための科目「エンタープライズ」を設置し、１年次には「アイデア企画演習」「ポップカルチャー分析」（大衆文化を題材とした探究）、２年次には「課題研究」を行うなど特色ある教育を実践している。

また、主体性を育むため、入学直後に２泊３日で学習方法のガイダンスやグループワークによる課題解決、生徒リーダーが企画運営する活動を実施しているほか、生徒フィールドワーク委員会を設置し、テーマや仮説を立て調査項目や検証方法など海外フィールドワークの活動内容を決定している。行き先や行動ルールも委員会が中心となり生徒全員で検討している。

東京都立小石川中等教育学校

文理融合を方針とし高校２年までは文理選択を行っていない。理科については、実験を重視しＳＳＨ校として自然科学分野の活動を充実させている。数値の扱い方やデータ収集・分析方法を学ぶとともに、９講座に分かれた課題研究を行うなど６年間を貫く課題研究に取り組んでいる。

また、探究心と主体性を育むため、生徒の自主的な研究活動を継続的に実施できるよう、科学分野で活躍する人と交流するサイエンスカフェや放課後等に実験室を開放するオープンラボを実施するなど特色ある教育を行っている。

Ⅲ　連携型中高一貫教育校の現状と課題

１　あわら地域（金津高校、金津中学校、芦原中学校）

本県では３つの地域で、市町立中学校の３年生の一部のクラスを連携クラスとして固定し、そのクラスの生徒を簡便な選考で高校に入学させ、高校での計画的・継続的な学習を保障するという中高一貫教育を実施している。あわら地域では、中学と高校のギャップをなくすため、高校教員による乗り入れ授業やサマースクールなど様々な交流を行っている。また、高校における連携クラスの生徒の大学進学への意識は高い。

（１）これまでの取組み

①　導入の背景、理念

確かな学力を身に付け、職業意識をもって進路選択し、将来地域社会に貢献できる生徒の育成を図るため、平成１９年度から中学３年次に連携クラスを編成し、平成２０年度に１期生が金津高校に入学している。

②　連携クラスの学級編成

中学校および高校ともに連携クラスの生徒だけで単独学級を編成している。中学校では各校１クラス、高校では２クラスを編成している。

【高校・中学校の連携クラスの生徒の推移】　（人）

学校名	Ｈ２９年度	Ｈ３０年度	Ｈ３１年度	Ｒ２年度	Ｒ３年度
金津高校	41(1 年) 47(2 年) 42(3 年)	45(1 年) 41(2 年) 47(3 年)	39(1 年) 44(2 年) 42(3 年)	33(1 年) 39(2 年) 44(3 年)	45(1 年) 33(2 年) 39(3 年)
芦原中学校(3 年)	19	17	9	21	19
金津中学校(3 年)	26	22	24	24	25

③　中高連携教育の内容

連携クラスの生徒を対象に、中学３年の４月から週１時間、高校の英語教員が中学校に出向き、長文読解等に関する発展的授業を実施している。また、１０月以降は週１時間、高校の数学や国語教員が中学校に行き、「数学Ⅰ」や古典文法など高校の授業内容の発展的授業を行っている。

また、長期休業を活用してサマーハイスクールやウインターハイスクールを実施し、中学３年生に対し国語や数学、英語の集中講義を行っている。

（２）あわら地域の課題等

［成果］

① 高校の授業への円滑な移行

中学３年から少人数による手厚い学習指導に取り組んでいるため、一般クラスの生徒より円滑に高校の授業に取り組めている。また、クラスのまとまりがよく、生徒同士の助け合いのほか、学校行事への参加も意欲的である。

［課題］

① 中学校３年における発展的な学習時間の確保

連携クラスの設置当初は中学校の選択教科の時間に、高校の教員が授業を行うことで、カリキュラムの特色化が図られ、それを魅力に感じる生徒が連携クラスに入ってきた。平成２４年度の学習指導要領の改訂で選択教科がなくなって以降は、夏季休業等を活用し発展的な授業を行っている。

② 魅力ある中高一貫したカリキュラムづくり

連携クラスのカリキュラムに、これといった特長を見出しにくいと感じる中学生は、福井市内の進学校を選択肢の一つとして考えていることもあり、高校入試まで進路決定を遅らせる傾向がある。また、金津高校への進学を志望している中学生の中にも、中高連携のカリキュラムに魅力を感じず、高校では通常クラスに在籍したいと希望する生徒は、中学３年次での連携クラスへの入級を見合わせている。

③ 適性検査の在り方と連携クラス生徒の学力向上

中学２年次に、作文と面接により中学３年の連携クラスに入級するための適性検査を実施しているが、連携クラスに幅広い学力層が入級することにより、その後伸び悩む生徒がいる。このため、授業の難易度を設定することが難しく、学習への意欲向上も困難となっている。結果的に一般入試で高校に入学する生徒の方が、高校入学後も学力が高くなる地域がある。

２　越前地域（丹生高校、朝日中学校、宮崎中学校、越前中学校、織田中学校）

越前地域では、丹生高校と朝日中学校が連携をスタートし、平成２７年度から宮崎・越前・織田中学校に拡大している。中学３年生からの発展的な学習や高校での特別セミナー、大学訪問等も行い、連携クラスの７割程度が大学に進学するなど生徒の進学への意識も高い。

（１）これまでの取組み

①　導入の背景、理念

確かな学力と豊かな人間性を育み、２１世紀の日本やふるさと福井の未来を切り拓く人材を育成するため、平成１９年度から中学３年次に連携クラスを編成し、平成２０年度に１期生が丹生高校に入学している。

②　連携クラスの学級編成

中学校には連携クラスの生徒だけの単独学級は設置されていない。丹生高校は、連携クラスの生徒だけで単独学級を編成している。

【高校・中学校の連携クラスの生徒の推移】　（人）

学校名	Ｈ２９年度	Ｈ３０年度	Ｈ３１年度	Ｒ２年度	Ｒ３年度
丹生高校	30(1 年) 28(2 年) 17(3 年)	20(1 年) 29(2 年) 28(3 年)	24(1 年) 20(2 年) 29(3 年)	17(1 年) 24(2 年) 20(3 年)	26(1 年) 17(2 年) 24(3 年)
朝日中学校(3 年)	15	17	13	16	8
宮崎中学校(3 年)	0	1	0	2	0
越前中学校(3 年)	2	3	1	2	2
織田中学校(3 年)	3	4	3	6	6

③　中高連携教育の内容

ア　中学校の取組み

朝日中学校は、数学と英語について１学期から週１回、連携クラスの生徒を取り出して、高校教員（Ｔ２）が指導に入っている。１月半ばまでに教科書を終え、３学期から週４回、高校教員（Ｔ１）が中学の授業内容の復習と発展学習（高校の科目である「数学Ⅰ」「英語表現Ⅰ」「コミュニケーション英語Ⅰ」）を実施している。

※「ティームティーチング」では、特定の教科で、主に授業を進める先生（Ｔ１）と生徒に個別に対応する先生（Ｔ２）が役割分担をして、生徒の個別課題に応じたきめ細かい学習指導を実施している。

その他の中学校では、連携クラスの生徒以外の生徒と一緒に授業を受け、高校の

免許を有する非常勤講師（町雇用）（Ｔ２）が指導に入っている。３学期からは、その非常勤講師が中学の授業内容の復習と発展学習を実施している。

また、夏季休業等を活用して、地域探究（「ＮＹＵ探究Ⅰ・Ⅱ」）や英検対策講座等の集中講義を行うサマーハイスクールやウインターハイスクールの開催、学ぶ意欲を高めるための県内大学への訪問を実施している。

ＮＹＵ探究Ⅰ：テーマごとに少人数のグループに分かれ研究を実施。高校生のほか中学生向けの発表会を開催

ＮＹＵ探究Ⅱ：福井県出身の各分野で活用している人と関わる講義、体験講座

イ　高校の取組み

数学と英語に関しては、中学での発展学習を踏まえ、高校１年次の「数学Ⅰ」や「コミュニケーション英語Ⅰ」を、通常クラスより各々１単位（各々年間 35 時間）減じ、他のクラスが２年次から学ぶ「数学Ⅱ」「コミュニケーション英語Ⅱ」を高校１年次から前倒し設定するなど学ぶ時期を早めている。

（２）越前地域の課題等

［成果］

①　高校の授業への円滑な移行

少人数による手厚い指導や、１学期から高校教員等が中学校の授業を担当することにより、３学期からの発展学習に円滑に移行できている。

中高連携による探究的な学びやふるさと学習で、地域コミュニティー運営委員会や地域の歴史文化グループとの連携が強化された。

［課題］

①　学習意欲を向上させる学習指導方法の策定

高校の入学者選抜が中学生の学ぶ大きな目的となっているため、進路が早期に決まる連携クラスの生徒は学ぶモチベーションが下がってしまう傾向がある。また、数学を苦手としている生徒が連携クラスの半数を占めており、一律の指導による発展学習では、高校生活に対する意欲を減退させる可能性がある。

②　連携クラスの魅力あるカリキュラムの策定

地域と連携した探究活動が中心となっており、日本や福井の未来と切り拓くという教育方針と合っていないと感じている生徒・保護者がいる。教育活動に生徒の視野を拡げる工夫が必要となっている。

３　美浜・若狭地域（美方高校、美浜中学校、三方中学校、上中中学校）

美浜・若狭地域では、美方高校と美浜・三方中学校が連携をスタートし、平成２７年度から上中中学校に拡大している。様々な中高連携の行事も行いつつ、高校では連携生の約４割が国公立大学に進学するなど生徒の進学への意識も高い。

（１）これまでの取組み

①　導入の背景、理念

高度に科学技術が発展した２１世紀の国際社会に通用する人材、地域に貢献する人材の育成を目指し、平成１８年度から中学２年、３年に連携クラスを編成（平成２４年から中学３年のみ）し、平成２０年度に１期生が美方高校に入学している。

②　連携クラスの学級編成

中学校には連携クラスの生徒だけの単独学級は設置されていない。また、必ずしも美方高校に進学する必要もない。美方高校は連携クラスの生徒と高校入試により入学した一般クラスの生徒による混合学級を編成している。

【高校・中学校の連携クラスの生徒の推移】　（人）

学校名	Ｈ２９年度	Ｈ３０年度	Ｈ３１年度	Ｒ２年度	Ｒ３年度
美方高校	28(1 年) 24(2 年) 19(3 年)	25(1 年) 28(2 年) 24(3 年)	25(1 年) 25(2 年) 27(3 年)	18(1 年) 25(2 年) 23(3 年)	26(1 年) 18(2 年) 25(3 年)
美浜中学校(3 年)	16	19	27	21	22
三方中学校(3 年)	19	24	23	20	23
上中中学校(3 年)	2	1	2	1	0

③　中高連携教育の内容

美浜中学校と三方中学校については、１学期は高校と中学校の教員がティームティーチング（ＴＴ）で数学と英語の授業を実施している。２学期以降は課外授業として中学の復習・発展、英語の検定試験に向けた学習に取り組んでいる。

上中中学校については、夏季休業中に集中講座を開催し中学の復習・発展学習を行うとともに、２学期以降は課外授業として中学の復習・発展、英語の検定試験に向けた学習に取り組んでいる。

また、長期休業を活用して、３つの中学校の生徒を対象に大学教授による理科実験学習等を行うサマーハイスクールや、２月以降には課外で入学前特別講座を実施している。

（２）美浜・若狭地域の課題等

［成果］

① 高校の授業への円滑な移行

小学校、中学校と共に学んできた生徒たちが、引き続き地元の高校でお互いが切磋琢磨している。また、高校の教員は入学してくる生徒の学習内容を把握した状態で高校の授業をスタートできている。

② 美方高校への入学の意識付け

連携生徒は必ずしも美方高校には入学する縛りがないが、中学と高校が交流を行うことにより、中学生が高校生活を具体的にイメージできており、美方高校への進学を意識する機会となっている。

［課題］

① 一貫した教育活動

中学校や美方高校ともに連携クラスの生徒のみの単独学級がないため、中学での発展学習が生かし切れない状況である。

② 学習意欲の低下と伸び悩み

簡便な選抜で高校に進学することができるため、一般入学者選抜を受ける生徒より普通科目を学ぶ目的意識が低く、緊張感なく過ごす生徒が多くいるため、進学に結び付く学力が伸び悩んでいる。

４　県教育委員会の支援

中学３年の連携クラスの生徒に対し、外部人材を招聘しての授業や教員研修のほか、課題探究に対する大学教員等の助言を得るなど各校の特色ある活動を支援している。

（１）スーパーティーチャーの招聘による指導充実

ア　目的

福井型中高一貫教育校の中学３年生に対し、関西地区の中高一貫教育校の教員による授業および教員の研修会を実施している。教員の指導力向上に加え、生徒の学習意欲の向上を図っている。

イ　実施内容

７０分授業２コマを１回として、３地域で年間２回、土曜日や夏季休業中などに実施している。

例）京都市立西京高等学校・附属中学校、奈良東大寺学園、西大和学園　など

（２）課題探究型の授業モデルの開発

ア　目的

生徒自らが課題を発見し解決する力を育成する。

イ　実施内容

中学３年生の興味・関心に合わせて研究実践活動を実施、学校内外での研究発表やコンテスト等で研究成果を発表する。福井大学や福井県立大学など県内大学の教員等を招聘し、土曜日や夏季休業中などに実施ガイダンスや中間発表、最終発表会の助言を得ている。

Ⅳ　福井県の中高一貫教育の充実に向けた提言

１　併設型中高一貫教育について

（１）多様な教育課程の充実

①　早期の混合クラス編成と取出しによる多様な授業

高志高校・中学校は併設型中高一貫教育校であり、内進生と高入生が切磋琢磨しお互いを高め合う教育環境を整備することが望ましい。

全国の併設型中高一貫教育校における学級編成を調べると、６割が高校１年生段階から内進生と高入生が混在する学級編成を採用している。高志高校の内進生は中学校で高校課程の早期履修を行っているため、先行履修している科目は取り出して別教室で授業を行うなどの工夫を行い、生活クラスとしての混合クラスを高校１年次から編成することが望ましい。また、内進生に可能な限り早く追いつきたいという高入生の希望がある場合には、長期休業等を活用した集中講義等も検討すべきである。

②　中学での先行履修の在り方と高校での進学型単位制の教育課程の改善

高志中学校の授業時間は、市町立中学校より３年間で３５０時間多く、各科目において学習内容が充実している。また、中高一貫教育の特例を活用し、高志中学校の３年次では高校授業の「数学Ⅰ」「生物基礎」を先行履修している。

大学進学を見据えた高校入学後の履修を考えると、数学については、中学校での先行履修の効果はあると考えられる一方、理科については、特定の分野に限定して先行履修するのではなく、中学校の授業時数特例校の活用も検討しながら、様々な発展学習を通して生徒の興味・関心を高める方法を考えることが望ましい。

また、高校の卒業生アンケートを見ると、先行履修は８割の生徒が役に立ったと回答しているものの、スピードは今より遅い方がよいと回答している生徒が１割程度存在することから、中学での学習支援の状況や、高校進学時での学び直しなど生徒の希望も考慮した対応を講ずるべきである。

③　全クラスを普通科系専門学科へ移行

高志高校は、平成１５年度の文部科学省ＳＳＨの指定以来４期１９年にわたるＳＳＨ事業、平成２６～３０年度のＳＧＨ、令和元年度からのＷＷＬへの参加等を通して、探究型学習の充実に取り組んできた。

新しい高等学校学習指導要領は、探究型学習の充実を柱としており、今後は、これまでの成果をさらに発展させ、国内外の大学や専門機関と連携した課題研究、海外の高校生との共同課題研究等にも取り組むことが望ましい。

高校の普通科の教育課程の編成では、週３０時間以上の授業時数の設定や特定の科目の減単が可能であり、学校独自の教科・科目は２０単位まで配置できるなど柔軟なカリキュラム編成が可能であるが、さらに専門学科は、普通科に比べ理数や英語の単位（学

習内容）を柔軟に配置することが可能で、例えば物理基礎・物理の２科目を包括した科目を設定し、実験を含めた専門的な学びを充実させることができる。また、専門学科は３年間で専門科目を２５単位履修するため、理数や英語教育を一層尖らせるカリキュラム編成が可能となる。

高志中学校での数学や理科の先行履修、文部科学省のＳＳＨやＳＧＨ事業の実績等を踏まえ、理数教育や国際教育を専門に学ぶ普通科系専門学科への改変を検討することが望ましい。

（２）探究型学習の深化

①　ＳＳＨ指定校として自然科学の課題探究も充実

正解のない時代を生き抜くためには、自ら課題を見つけ、多様な人々と協働しながら解決していく力が求められている。大学受験という外発的な学びだけでなく、知りたいという探究心など内発的な動機付けに基づく学びがますます重要になっている。本気で挑戦している人や本物の資料等に触れることで、生徒は多様な興味・関心を持つことから、課題探究は、専門学科（特に理数に関する学科）のカリキュラムに実験を多く取り入れるなどの特色を持たせ、自らの問題意識を掘り下げることで、個別最適化された探究へと発展させていく必要がある。

②　ＳＳＨやＳＧＨ事業において、研究機関や国内外の高校と連携した課題研究の推進

校内にとどまることなく、大学や地域との連携、または他校との切磋琢磨、海外へと飛び出すような活動を積極的に導入すべきである。例えば、姉妹校や研究連携校を設けての交流や協働、または産学官が支援する地域探究のコンソーシアムへ参画し、探究の全国・国際規模のプロジェクトへの参加や探究学習のスキルアップのための教員の学び合いなども検討すべきである。

【高問協答申のポイント（高志・藤島・武生・若狭ＳＳＨ４校）】

（２）探究的活動の深化

①研究機関や海外の高校等と連携した探究的活動の推進

ＪＡＸＡや理化学研究所、東京大学等の研究機関の人材を、オンライン上でアドバイザーとして招聘し、専門的見地から助言を受けることも必要である。

また、海外の高校等と共同研究を実施し、研究成果を国外の大会でも英語で積極的に発信し外部評価を得ることが重要である。

（３）主体的な学びを育む教育環境の整備

①　混合クラスや自然科学分野の課題研究を強化するための施設整備

高志高校を早期の混合クラス編成へ移行するためには、先行履修している数学等の取出し授業が必要となるため選択教室を確保する必要がある。また自然科学分野の探究活動に打ち込めるよう既存校舎の改修により実験室等を充実すべきである。

②　生徒が主体的に活動するための教育環境の整備

自尊心や忍耐力等の「自己に関わる心の力」や共感や協働など「社会性に関わる心の力」など、受験で求められる学力では測れない能力（非認知能力）が、将来に大きな影響を及ぼすと言われている。このため、外部人材や団体等を活用しながら、校則や暗黙のルールについて、教員や生徒と議論して、生徒たち自身がより良い学校生活のためにルールを変えていく当事者となるなど、生徒が主体的に行動できる学校づくりを進めていく必要がある。

③　高志の中高生が語り合える場や生徒一人一人がリーダーを経験できる環境の充実

高志高校・中学校の教育目標である地域社会、国際社会のリーダーを養成するためには、中学校と高校の縦のつながりを重視することが望ましい。例えば高校生や卒業生をメンター（指導者）として中学生の学習習慣や自主学習の指導、学習面を含めた学校教育への質問対応等の支援を行うことは、メンターとなる高校生の育成にもつながるものであり、責任感や主体性、対話力を育むものとして導入を検討すべきである。メンタータイムの導入に当たっては、定期的な交流の機会を設けるなど、信頼関係を醸成することが必要である。

④　オンライン全国アカデミーへの参加

将来の進路を考え始める中学生の間に、可能な限り多様な大人や全国の同年代の生徒と交流し、議論することは重要であると考える。このため、オンライン等を活用した、“つながる環境”を用意し、様々な生き方をしている大人へのインタビューや、生徒間の意見交換、それらを自分の意見としてまとめ発信していく活動を検討することが望ましい。

（４）入学選抜の見直し

ア　高志中学校入学者選抜

選抜は３種類の適性検査（Ⅰ：日本語の文章読解力や表現力等をみるもの、Ⅱ：数や図形等に関する力をみるもの、Ⅲ：資料やデータを解釈したり自然や社会の現象について考えたりする力をみるもの）に加え、平成３１年度までは作文、令和２年度からは面接によって行われてきた。適性検査については、Ⅱ・Ⅲの難易度が高く選抜のための検

査としての有効性が疑問視される年もあった。

各適性検査においては、複数の知識を組み合わせて考えたり自分の考え・意見を論理的に表現したりする応用的な問いを設定し、小学校の学習内容の定着を確認するとともに、調査書やその他の提出書類等を活用して探究活動等の取組みを評価するなど、中・高の６年間で伸びる潜在能力を効果的に測定できる内容を、さらに研究する必要がある。

イ　高志高等学校入学者選抜

高等学校教育問題協議会の答申（Ｒ２．６）を踏まえ、海外留学や海外大学進学希望者、数学オリンピックの参加経験者など高志高校が求める人材像（アドミッションポリシー）を意識した入学者選抜制度を導入することが望ましい。

その際は、出願条件として、小中学校時代のどのような経験や実績を求めるのかなど、従来の特色選抜において受験生に課す国語、数学、英語の３教科の学力検査のほかに、学校独自の選抜方法等を実施することも考えられる。

【高問協答申のポイント（高志・藤島・武生・若狭ＳＳＨ４校）】

（１）多彩な教育課程等の設置

①高校入試における特色選抜等の拡充等

高校入試において、秀でた才能や得意な教科、領域を持つ中学生を対象とした特色選抜を実施するとともに、科学オリンピック（数学、物理、化学、生物、地学）や情報オリンピックの対策講座を開催するなど国際大会を目指す生徒や指導教員のレベルアップを支援すべきである。近年、国の高大接続改革の流れの中で、東京大学など難関大学においても従前の推薦入試やＡＯ入試を導入･拡充する動きがあり、こうした動きにも対応していくことが求められる。

２　連携型中高一貫教育について

（１）中高連携クラスの育成方針の明確化

簡便な試験で高校に進学する連携クラス生徒の学ぶ意欲の維持・向上が課題となっている。このため、高校入学後の活動内容や、それに求められる学力を「見える化」し、また高校卒業後の先の世界を見せることにより、中学段階から学ぶ目的意識を常に持たせることが必要である。

この際、中高連携クラスの教育において、タブレット端末の徹底活用や教員の指導型から支援型への転換を通した主体的な学び、中学段階での探究活動について、モデル的な教育を実践するなど魅力的なカリキュラムを実践すべきである。

（２）学ぶ意欲の向上とふるさとへの誇りを育む中高一貫した探究活動の実施

①　「中高一貫教育推進アドバイザー」の設置

（１）の育成方針を踏まえ、中高一貫教育を推進していくためには、学校は意識を変え新たな発想を持って、生徒に選ばれる魅力ある教育活動を展開していく必要がある。このため、次の②～④の活動を支援・助言する外部のアドバイザーを設置することが望ましい。

②　生徒の心に火をつけるオリエンテーション集中合宿の開催

中学３年の連携クラスへの入級直後に、各校の連携クラスの生徒が一同に集まり、数日間の寝食を共にし、連携クラスのつながりを深めるとともに、自分は高校に進学し「何に挑戦したいのか」「高校で何を学ぼうとするのか」あるいは「社会のリーダーとしてどう貢献するのか」についてキャリアガイダンスを行うなど連携生としてのアイデンティティを学ぶ場として合宿を開催することが望ましい。事前に募集した生徒たちが、合宿の企画・運営に携わり、何かを作り上げる成功体験を経験させることも検討すべきである。

③　生徒の主体的な学びの習慣化

高校進学後に大きな飛躍を遂げるためにも、中学段階から教員は指導（ティーチング）から支援（コーチング）へと転換を図り、学習アプリなど様々なツールを活用した個別の学びを進め、より主体的な学びを早期に身に付けさせるべきである。

④　中高一貫した探究プログラムの策定

探究活動については、国の学習指導要領においても、中学校や高校の年次ごとの指導内容が明確ではなく、中学校や高校において学ぶ内容が統一されていない。このため、テーマ設定や仮説の立て方、データ分析・検証の方法等の探究基礎の習得や、県内外の

大学、企業と協働した活動、課題探究の成果発表まで中高一貫したプログラムを策定することが望ましい。

⑤　挑戦する生徒の育成

日ごろの語学習得や探究活動の成果を生徒が感じ、また外部からフィードバックを得るため、学校内にとどまることなく、中学生や高校生に日ごろの学びの延長で様々な挑戦を行わせるべきである。中学生の高校での探究学習発表への参加や、英語による探究講義など高大連携事業の見学、訪日している海外の生徒等との英語での討論など様々な機会を検討すべきである。

【参考　高校生ワールドハピネスフォーラム】

地方創生に向けた各高校の取組みを伝え合い議論や交流を行う武生東高校が主催する国内生徒と海外生徒３０名が集うフォーラム

⑥　視野を拡げる海外を含めた選択型研修旅行等の検討

中高一貫した探究活動の一環として、例えば課題テーマに沿った海外の現状見学や現地の人々との交流、これまでの生徒自身の探究活動の発表などを通して、世界の人々と互いに学び合い、見聞を広める教育活動も検討すべきである。

⑦　高校の先にある大学進学や、さらにその先の就職をイメージ

中学での発展学習や高校での前倒し学習、特色ある英語教育活動については、生徒一人一人の学ぶ目的が明確でなければ、主体的な学びを継続することが難しい。例えば最先端企業の訪問や、県内企業や研究機関との交流を増やし、先輩たちが活躍している姿を見せることにより、将来の進路を具体的にイメージさせることが望ましい。

（３）併設型に近い福井県独自の中高一貫教育の実施

①　中学３年次の連携クラスに高校の担任（副担任）予定の教員を選任

高校教育への円滑な移行を行うためには、高校教員が中学段階から生徒と信頼関係を築き、性格や学力定着度を把握することが望ましい。このため、可能な限り高校１年次の予定担任・副担任を選任し、中学校での指導に当らせることも検討すべきである。

②　中学での発展的授業の強化

中学校で連携クラスを編成し、簡便な適性検査で高校の連携クラスにスライドさせる本県独自の制度を活用し、高校の授業内容を含む発展的授業の強化を図るべきである。中学３年次の夏季休業等や補充学習の充実、７限目の設置もしくは、中学校の授業時数特例校の活用、高校への登校日を設けての講義やオンラインを活用した講義を検討すべきである。

この場合、高校教員や県教育委員会の大学進学サポートセンター教員を中学校に派遣しての学習や確認テストの実施などが望ましい。これらの活動が学校現場において着実に実施できるよう派遣体制の充実を考える必要がある。

③　金津・丹生高校に加え美方高校に連携生だけのクラス設置

中学校での発展学習や主体的な学び、探究活動を踏まえ、高校において継続した教育活動を実施するためには、従来から連携クラスを設置している金津高校や丹生高校に加え、美方高校についても連携生だけのクラスを編成することが望ましい。

④　高校での連携クラス独自のカリキュラムの策定

中高連携クラスの育成方針や中学校での主体的な学びの習慣化、発展学習の学力定着度を踏まえ、高校においては、１年次の科目の単位を減じて、より発展的な学習を実施したり、高校２年次の学びを前倒しするなど大学受験等にも備えた独自のカリキュラム編成を行うことも検討すべきである。

⑤　特色ある英語教育の実施

高校入試の影響を受けない教育が可能なことから、受験日程に縛られることなく、中学段階から英語の「話す」を含めた４技能（読む、書く、聞く、話す）を伸ばす教育を検討すべきである。例えば、中学校と高校において「オールイングリッシュ」を含めた様々な取組みや、補充学習等にラジオ英語講座等を取り入れるなど、リスニング・音読を強化する教育の実施を検討するとともに、レベルの高い英語の検定試験に挑戦できる機会を設けるべきである。また、物おじせず自分の意見を論理的に表現する力を併せて養うことも考えるべきである。

（４）高校生の学ぶ意欲の向上と中高一貫教育の中学生へのＰＲ

中学１年次から高校生と交流することは、中学３年次には「連携クラスに入級し、将来は先輩のように頑張りたい」というインセンティブになると考えられる。また高校生にとっても責任感や学ぶ意欲の醸成に繋がる。

福井大学教育学部では嶺南地域枠を設け人材を育成していることから、例えば美方高校の高校生が教員とともに中学校へ出向き、教員支援のもと授業の指導や、中学生の探究活動の支援等を行い教師の魅力を伝えていくことも考えられる。

また、夏季休業等を活用し高校でオープンラボ（理科実験）等のイベントを企画するなど、高校での学びをイメージさせる取組みも検討すべきである。

Ⅴ　提言の実現に向けて

本県に中高一貫教育が導入されてから１６年が経過し、併設型中高一貫教育については６年が経過した。この間、社会においては、ＩｏＴやロボット、人工知能（ＡＩ）、５Ｇ等が実用化されるなど、あらゆる分野に情報通信技術が浸透するほか、ＳＤＧｓなど地球規模で物事を考えていくグローバル化が進展した。

また、学校教育を取り巻く環境も大きく変化し、国の高大接続改革（総合型選抜等の導入など入試改革）や学習指導要領の改訂、GIGA スクール構想が進んでおり、特色ある学びや主体的で個に応じた最適な学び、タブレット端末を活用した距離の制約を受けない学びが可能となるなど高校や中学校の教育の変化が求められている。

県内においては、中学生の地域を超えた高校への進学が進む一方、高校生の学校外での学習時間が減少している状況もある。中高一貫教育においては、スクール・ポリシーを明確にし、学校間で目標を共有しつつ、社会で求められる資質や能力は何かを絶えず把握することが必要である。

県教育委員会や市町教育委員会は、教育現場において着実に提言の実現が進むよう人的・財政的な支援を行うとともに、中高一貫教育の充実に向け関係者と調整しながら、計画的かつ効果的に実施することを要望する。そして、特色あるカリキュラムづくりやクラス編成、中高生の交流などは中学校および高校の校長がリーダーシップを持って、速やかに実行に移すことを期待する。

参考資料

1　中高一貫教育の制度と本県の状況

2　高志高校・中学校の概要

3　高志高校・中学校の入学者選抜志願倍率

4　高志中学校の市町別入学状況（過去３年）

5　高志高校・中学校のコンテスト等の入賞業績

6　高志高校の主要大学合格実績

7　「高志学」６年間の概要

8　英検取得状況

9　高志高校・中学校に関する卒業生アンケート結果

10　福井県高等学校教育問題協議会答申抜粋

11　福井県中高一貫教育検証委員会　検討経過

12　福井県中高一貫教育検証委員会　委員名簿

No 1

中高一貫教育の制度と本県の状況

1　中高一貫教育の制度

（1）目的

・従来の中学校・高校の制度に加えて、生徒が6年間の一貫した教育課程や学習環境の下で学ぶ機会を選択できるようにする。

・中等教育の一層の多様化を推進し、生徒一人一人の個性をより重視した教育の実現を目指す。

（2）種類

ア 中等教育学校

・一つの学校として一体的に中高一貫教育を行う。

・県内には当該学校は設置していない。

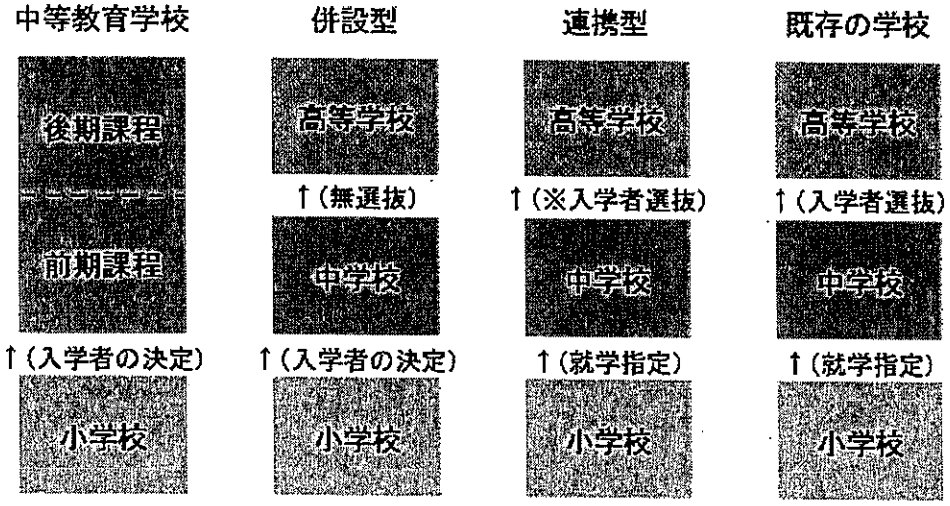
イ 併設型の高等学校・中学校（高志高校）　設置者が同じ

・高校の入学者選抜を行わずに，同一の設置者による中学校と高校を接続する。

・高校の指導内容の一部を中学校へ移行することが可能。この場合、高校で再履修しないことが可能

ウ 連携型の高等学校・中学校（金津高校、丹生高校、美方高校）　設置者が異なる

・中学校と高校が、教育課程の編成や教員・生徒間交流等の連携を行う。



※調査書及び学力検査の成績以外の資料により行うことが可能

（文部科学省 HP　抜粋）

2　中高一貫教育校の特例

<table>
<tr><td></td><td></td><td>中等教育学校
併設型</td><td>連携型</td></tr>
<tr><td rowspan="2">中学校段階</td><td>選択教科による必修教科の代替え</td><td colspan="2">必修教科の授業時数を年間７０単位時間内で減じ、当該必修教科の内容を代替することができる内容の選択教科の授業時数に充てることができる</td></tr>
<tr><td rowspan="3">指導内容の移行</td><td>①中学校と高校の指導内容の入れ替え

②中学校から高校へ指導内容の移行

③高校から中学校への指導内容の移行
※この場合、高校で再履修しないことが可能

④中学校段階内の学年間において指導内容の一部を移行</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">高校段階</td></tr>
<tr><td>普通科における「学校設定科目」「学校設定教科」</td><td colspan="2">３６単位まで</td></tr>
</table>

連携型：６年間の計画的かつ継続的な教育を施し、生徒の個性の伸長、体験学習の充実を図るための特色ある教育課程の編成

3　福井県の中高一貫教育

（１）併設型中高一貫教育校の概要

高校入学者選抜を行わずに６年間の中高一貫教育を実施する。

（令和３年度　（　）高志中学校からの内進生の在籍数）

学校名		1年	2年	3年	連携の内容
高志高校		248(87)	247(87)	239(81)	高校3年生は混合クラス
	高志中学校	90	90	90	

（２）連携型中高一貫教育校の概要

中学３年生への進級段階で連携クラスの生徒を選考（福井型）し、簡便な選抜により高校に進学させる。

（令和３年度　（　）連携クラスの生徒数）

学校名		1年	2年	3年	連携の内容
金津高校		218(45)	209(33)	217(39)	連携生徒のみの2クラス
	芦原中学校	60	85	78(19)	3年から連携生徒の単独学級を編成
	金津中学校	135	124	124(25)	
丹生高校		107(26)	105(17)	121(24)	連携生徒のみの1クラス
	朝日中学校	102	83	101(8)	3年から連携生徒が集まって数学と英語の講座を編成
	宮崎中学校	36	24	33(0)	
	越前中学校	31	26	30(2)	
	織田中学校	35	36	38(6)	
美方高校		72(26)	94(18)	92(25)	連携クラスなし
	美浜中学校	68	61	69(22)	美浜・三方中学校は3年から連携生徒が集まって数学と英語の講座を編成
	三方中学校	58	67	62(23)	
	上中中学校	80	63	69(0)	

No 2

高志高校・中学校の概要

1　高志中学校開設の経緯

(1) 改革検討委員会での議論、県教育委員会の発表

平成２５年１月：福井県立高等学校改革検討委員会
「福井県における中高一貫教育の推進について～併設型中高一貫教育の導入等に関する議論のまとめ～」提言を公表

平成２５年３月：福井県教育委員会
「福井県における中高一貫教育校(附属中学校併設)の設置方針」を公表

(2) 開校準備（校舎改築工事、教員派遣研修）

平成２５年４月：校内準備委員会立ち上げ。以後学校教育政策課と定期的に準備会議を開催。茨城県、静岡県、長野県の公立中高一貫校に、教員各１名を１年間派遣

平成２６年２月：福井県立高志中学校設置に関する福井県立学校設置条例一部改正

平成２６年４月：福井県立高志中学校設置。

平成２６年12月：第１期増築工事竣工(中高職員室・学習室、校門・校名碑他)

平成２７年２月：大阪府の私立中高一貫校に教員２名を１週間派遣

平成２７年２月：第２期増築工事竣工(中学技術室、中学保健室ほか)

平成２７年４月：福井県立高志中学校開校。第１期生９０名入学

平成２７年４月：京都府の公立中高一貫校に１名を１年間派遣

平成３０年１月：若葉食堂（ランチルーム）竣工。給食開始

2　教育目標

平成２５年３月「福井県における中高一貫教育校(附属中学校併設)の設置方針」で公表された、高志高校・中学校における併設型中高一貫教育の教育目標は、以下のとおりである。

「地域社会、国際社会のリーダーとなる高い学力と豊かな人間性」

「ふるさと福井への深い理解と大きな誇り」

「世界に通用する語学力と国際感覚」

3　教育概要

・高志中学校は、３０名×３学級を募集

・内進生は高校入学者選抜を経ずに、高志高校に進学

・高志高校では、高校入学者選抜で４０名×４学級を募集

・高入生と内進生が、学習や部活動、探究活動等で切磋琢磨する併設型中高一貫教育を実施

・高志高校では、進学型単位制教育課程を実施。２年次に文・理分け、３年次に志望大学による類型分けを実施

4　高志中学校、高志高校の学級編成、生徒数（令和３年度）

【中学校】

	１年	２年	３年	備考
Ａ組	３０	３０	３０	
Ｂ組	３０	３０	３０	
Ｃ組	３０	３０	３０	

【高校】

	１年	学級	２年	学級	３年	学級
１組	４１	高入	４１	高入理系標準	３１	理系類型ｂ・ｃ
２組	４０	高入	４１	高入理系発展	３２	理系類型・ｂ
３組	４０	高入	３８	高入文系標準	３６	理系類型・ｂ
４組	４０	高入	３９	高入文系発展	３６	理系類型ａ
５組	２９	内進	３０	内進文系発標	３８	文系類型ｂ・ｃ
６組	２９	内進	２８	内進理系標準	３８	文系類型ｂ
７組	２９	内進	２９	内進理系発展	２８	文系類型ａ

※２年次　発展クラス……発展的な内容を含む学習を一定以上のスピードで学習するクラス

標準クラス……基礎的から発展的な内容の学習をじっくりと学習するクラス

※３年次　類型ａクラス……国公立超難関大学、医学部医学科を志望するクラス

類型ｂクラス……国公立難関１０大学～地方大学を志望するクラス

類型ｃクラス……芸術、看護等特色ある選抜を行う大学を志望するクラス

5　高志中学校の教育の特色

・授業時数の増加、高校課程の先行履修

標準授業時数と比較して、３年間で合計 350 時間多くの授業を実施

３年での数学Ⅰ、生物基礎の早期履修

学校設定教科「論文基礎」：論文作成に必要な知識・技能を習得する

「英語表現基礎」：外国人教員が単独で授業

・英語コミュニケーション能力の育成

朝活動の基礎英語（ラジオ講座）やＩＣＴを活用した学習支援

課外活動…英語教員や ALT が、英語ディベートに参加する生徒の支援

検定受験…卒業までに全員が英語検定準２級に合格することを目標

・嶺南研修（1 年）、東京研修（2 年）、シンガポール研修（3 年）

・土曜活用授業

スーパー・ティーチャー（大学、他県中高一貫の教員）による授業

・特別活動

学校祭は、高校と合同で実施。生徒会活動は、高校とは別の組織であるが、高校生徒会と合同で活動する場も設定

6　高志高校の教育の特色

・進学型単位制教育課程

生徒の興味関心、進路希望に応じて科目を選択

・スーパーサイエンスハイスクール、スーパーグローバルハイスクール

スーパーサイエンスハイスクールの指定は、第４期の４年目（通算１９年目）を迎えている。平成２６～３０年度には、スーパーグローバルハイスクール（ＳＧＨ）にも指定。

東京大学、京都大学大学院、福井経済同友会等と連携

・英語コミュニケーション能力の育成

英語４技能を総合的に伸ばす学校設定科目の設定

「英語活用ＡＥ（Advanced Expression)」、「英語活用ＢＥ（Basic Expression)」

「英語活用ＤＤ (Debate & Discussion)」、「英語活用ＲＰ (Research & Presentation)」

「英語表現ＣＷ（Change the World)」

・選択型研修旅行

【サイエンス研修】アメリカ東海岸、アメリカ西海岸、マレーシア、シンガポール、オーストラリア、国内（首都圏）

【グローバル研修】タイ、ベトナム、オーストラリア、国内（首都圏）

・課外授業、特別講座、個別指導

・特別活動（学校行事、部活動、生徒会活動等）

学校行事、部活動、生徒会活動等の特別活動では、中高が合同で取り組む内容を充実

・海外留学の奨励

ＳＧＨに指定された平成２６年度以降、海外留学を積極的に奨励。

No 3

高志中学・高等学校の入学者選抜志願倍率

	高志中学校			高志高等学校　（　）理数科		
	募集人員	受験者	倍率	募集人員	受験者	倍率
平成 27 年度	90	545	6.06	266 (38) ※推薦 0 (17)	416 (33)	1.56 (1.57)
平成 28 年度	90	316	3.51	228 (38) ※推薦 2 (17)	336 (33)	1.49 (1.57)
平成 29 年度	90	336	3.73	234 (39) ※推薦 0 (18)	343 (28)	1.47 (1.33)
平成 30 年度	90	339	3.77	160 ※推薦 1	272	1.71
平成 31 年度	90	327	3.63	160	295	1.84
令和 2 年度	90	329	3.66	160	301	1.88
令和 3 年度	90	327	3.63	160	275	1.72

No 4

高志中学校の市町別入学状況（過去３年）

市町	平成31年度			令和2年度			令和3年度		
	ア 県立中入学者数	イ 全児童数	割合 (ア÷イ)	ア 県立中入学者数	イ 全児童数	割合 (ア÷イ)	ア 県立中入学者数	イ 全児童数	割合 (ア÷イ)
福井市	55	2,310	2.4%	45	2,288	2.0%	61	2,280	2.7%
永平寺町	4	165	2.4%	2	156	1.3%	2	171	1.2%
大野市	0	256	—	0	256	—	4	234	1.7%
勝山市	2	181	1.1%	4	174	2.3%	1	161	0.6%
あわら市	4	203	2.0%	2	217	0.9%	1	196	0.5%
坂井市	11	861	1.3%	13	889	1.5%	7	872	0.8%
鯖江市	5	679	0.7%	8	697	1.1%	5	702	0.7%
越前町	0	208	—	0	174	—	0	202	—
越前市	6	763	0.8%	6	740	0.8%	3	716	0.4%
池田町	0	14	—	0	16	—	1	12	8.3%
南越前町	0	90	—	1	79	1.3%	0	83	—
敦賀市	3	587	0.5%	9	642	1.4%	2	568	0.4%
小浜市	0	244	—	0	223	—	0	244	—
美浜町	0	67	—	0	60	—	1	67	1.5%
高浜町	0	111	—	0	68	—	0	80	—
おおい町	0	69	—	0	71	—	0	65	—
若狭町	0	123	—	0	121	—	0	129	—

No５

高志高校のコンテスト等の入賞実績

【表１】高志高校生の英語関係の各種大会・コンテスト結果、海外留学等（令和元年度）

全国高校生英語ディベート大会準優勝（団体）・優秀ディベーター賞（個人）
高校生英語ディベート東海ブロック大会　第２位
Make Friends Cup in Fukui 優勝・ 優秀ディベーター賞 第２位
全国高校生英語ディベート大会関西ブロック予選 in 滋賀 第３位
海外留学　長期留学３名（カナダ、ニュージーランド、オーストラリア）、短期留学１４名
トビタテ！留学ＪＡＰＡＮ　２名（イギリス、アメリカ）
ＡＩＧ高校生外交官　１名（アメリカ）、公文財団奨学金事業　１名（スイス）

【表２】「ふくい理数グランプリ」における高志高校生の主な成績

平成２８年度	理科部門最優秀賞（団体）最優秀賞・優秀賞（個人）、数学部門優秀賞（団体）
平成２９年度	理科部門優秀賞・奨励賞（団体）
平成３０年度	数学部門最優秀賞（団体）、数学部門奨励賞・理科部門奨励賞（個人）
令和　元年度	数学部門最優秀賞・優秀賞・奨励賞（団体）
	理科部門最優秀賞・優秀賞・奨励賞（団体）
令和　２年度	数学部門優秀賞・奨励賞（団体）
	理科部門最優秀賞・優秀賞・奨励賞（団体）

【表３】高志高校生の学会等での発表

令和　元年度	宇宙技術および科学の国際シンポジウム
	高校生環境フォーラム、日本遺伝学会
	日本再生医療学会、ジュニア農芸化学会
	東京都立戸山高校発表会
令和　２年度	高校生環境フォーラム
	日本金属学会、兵庫県立豊岡高校発表会、東京都立戸山高校発表会

【表４】高志高校生の課題研究関係コンテストの全国入賞実績

令和　元年度	日経ストックリーグ　高校生部門　第１位
	全国中高生のための英語プレゼンテーションコンテスト
	（チェンジメーカーアワード）団体の部　銀賞

No５

高志中学校のコンテスト等の入賞実績

【表１】全国中学生英語ディベート大会における高志中学生の成績

平成２９年度	３位
平成３０年度	優秀ディベーター賞（個人）
令和　元年度	７位

【表２】「科学の甲子園ジュニア」における高志中学生の主な成績

平成３０年度	実技工作競技２位（団体）・総合９位
令和　２年度	エキシビション大会　総合１０位

【表３】「ふくい理数グランプリ」における高志中学生の主な成績

平成２８年度	数学部門優秀賞（団体）　理科部門最優秀賞（団体）　理科部門最優秀賞（個人）
平成２９年度	数学部門奨励賞（団体）　数学部門優秀賞（個人）・奨励賞（個人）
	理科部門優秀賞（個人）
平成３０年度	数学部門最優秀賞（団体）・優秀賞（団体）・優秀賞（個人）
	理科部門優秀賞（個人）

【表４】「科学の甲子園ジュニア」「ふくい理数グランプリ」以外の理数系コンテスト等における高志中学生の主な成績

平成２８年度	日本ジュニア数学オリンピック甲信越・北陸地区優秀賞
平成２９年度	日本ジュニア数学オリンピック甲信越・北陸地区優秀賞
平成３０年度	南部陽一郎記念ふくいサイエンス賞　優秀賞（団体）
	日本ジュニア数学オリンピック甲信越・北陸地区優秀賞（団体）
	日本再生医療学会総会中高生のためのセッション（ポスター部門）　金賞
令和　元年度	マグネットコンテスト　最優秀賞（個人）・佳作（個人）
令和　２年度	ＰＣＮこどもプロコン　中学生ソフトウェア部門　ＰＣＮ特別賞
	自然科学観察コンクール　佳作（個人）
	マグネットコンテスト　最優秀賞（個人）・審査員特別賞（個人）

No 6

高志高校の主要大学合格実績

入試年度	Ｈ３０入試	Ｒ１入試	Ｒ２入試	Ｒ３入試
３年生徒数	２９７	２５８	２６６	２４５
国公立大学合格者数	２１１	１８４	１９６	１７９

入試年度	Ｈ３０入試	Ｒ１入試	Ｒ２入試	Ｒ３入試
北海道大学			4	4
東北大学	1	1		2
東京大学	1	3	1	１０
一橋大学				1
京都大学	1	2	3	4
名古屋大学	7	5	１３	9
大阪大学	6	5	3	9
神戸大学	１４	１２	6	１６
九州大学	2	2	1	1
国立医学科	5	1	4	3
私立医学科	4	1	2	2
自治医科大学	1		1	1
早稲田大学	4	5	4	１１
慶應大学	2	3		4
関西大学	３０	１０	１８	１８
関西学院大学	１１	7	１６	１５
同志社大学	２０	１５	１９	２７
立命館大学	６３	５９	３６	８６

［参考］　令和３年度大学入試における主要地元国公立大学合格実績

入試年度	Ｈ３０入試	Ｒ１入試	Ｒ２入試	Ｒ３入試
福井大学	６２	４２	４２	２４
福井県立大学	１３	１５	１３	１０
金沢大学	３２	２７	２０	２５
富山大学	１２	7	１１	１１

No 7

高志高等学校・中学校における「高志学」６年間の概要

大学等での研究 → 国際社会・地域社会の課題解決に貢献

これからの時代を創る新しいタイプのリーダー

～「ふるさと福井」に対する誇りとグローバルな視野を持って新しい分野にチャレンジし、社会を変革していく人～

高志高校での３年間

【コンテスト等への挑戦】
○数学・科学オリンピック
○ふくい理数グランプリ　等

【成果の発信】
○「高志の学びフェア」
○福井県合同課題研究発表会
○各種フォーラム、学会等

【海外留学支援】
【海外大学進学支援】

【進学型単位制】
○興味・関心のある教科・科目を選択
○志望大学合格に向けた学習

【海外ネットワーク】
○ニュープロビデンス高校（米国）
○カセサート大学附属学校（タイ）　等

【校外研修】
○若狭湾エネルギー研究センター
○地学野外研修
○研究機関・企業等研修　等

【選択型研修旅行】
○アメリカ(S/G)
○マレーシア(S)
○オーストラリア(S/G)
○タイ(G)
○ベトナム(G)
○東京(S/G)

【特色あるＳＳＨの学校設定科目】
○KoA-R・S Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
○英語活用RP・DD等
○英語表現CW

【国内ネットワーク】
○都立戸山高校(SSH)
○筑波大附属坂戸高校(SGH)
○金沢大附属高校(WWL)

SSH

自然科学領域の新事実を解明

SGH WWL

グローバル・ローカルな課題を解決

３年：研究発表（論文・レポート・プレゼン）
　　大学での学びの設計書
２年：グループ・個人での課題研究、中間発表
１年：探究スキルの習得、テーマについての情報収集

東京大学　京都大学
福井大学　日華化学
清川メッキ　理化学研究所　福井経済同友会
福井大学メンター
高志高校同窓会・ＰＴＡ
【大学・企業・研究機関等によるサポート】

高志中学校での３年間

【卒業論文】
課題研究のまとめとして約8,000字の論文を作成

【海外研修（シンガポール）】
○企業訪問で海外で働くことについて研修
○大学・学校訪問で英語・グローバルマインドセット研修

【フィールドワーク】
県内企業・県庁各課等での調査・情報収集

【発表会・コンテスト等への参加】

【国際交流】シンガポール大学附属理数学校との文通・オンライン交流

【県内10社リレー講座】
県内の製造業・サービス業等の経営者による授業

【県外研修（東京）】
○大学・企業等訪問
○福井出身の企業人へのプレゼン・懇談　等

【各教科の学習】
○探究的な学び
○学校設定教科
「英語表現基礎」
「論文基礎」

ふるさと教育
福井の自然、歴史、文化、産業などについて学習

課題研究
各自の研究テーマに沿った研究を進め、新しいアイデアを提案・発信

キャリア教育
福井の産業、企業等について学習、働くことについて理解

【県内研修】
○県内各博物館等訪問
○伝統工芸士訪問
○職場体験　等

福井県立大学（講師派遣）
福井経済同友会（講師選定・派遣、企業訪問支援）
福井県庁（講師派遣、フィールドワーク受入れ）
【大学・企業等によるサポート】

No８

英検等取得状況

高志高校

（人）

CEFR	H30年度　高３	R1年度　高３	R2年度　高３
B２以上 （実用英語技能検定準１級他以上）	6	4	17
B１ （実用英語技能検定２級他以上）	171	167	164
A２ （実用英語技能検定準２級他以上）	81	95	63
A１ （実用英語技能検定３級他）	2	0	1
合計	260	266	245

高志中学校

（人）

英検取得状況	H30年度　中３	R1年度　中３	R2年度　中３
１級	0	0	0
準１級	3	4	0
２級	44	46	28
準２級	37	40	54
３級	4	0	3
４級	2	0	0
５級	0	0	0
合計	90	90	85

No 9

高志高校・中学校に関する卒業生アンケート結果（生徒）

【調査要領】

対象生徒：令和２年度高志高校卒業生、保護者
実施時期：令和３年２月
回答状況：内進生 81 人/88 人 （回答率 92.0%）　内進生保護者 82 人/88 人（回答率 93.1%）
高入生 154 人/158 人(回答率 97.5%)　高入生保護者 105 人/158 人(回答率 66.5%)

1　クラス編成について（内進生・高入生）

現　　状　　１・２年生は内進生と高入生は別々クラス　３年生は混合クラス

アンケート結果

項目	内進生		高入生	
	人数	割合	人数	割合
１年次から混合クラス	20 人	**24.7%**	28 人	**18.2%**
２年次から混合クラス	23 人	**28.4%**	19 人	**12.3%**
今のまま	33 人	40.7%	83 人	53.9%
最後まで別々	5 人	6.2%	24 人	15.6%

・早期の混合クラス編成を希望する生徒が存在（内進生 **53.1**%　高入生 **30.5**%）

（早期の混合クラスを望む理由）
・交流が無ければ中学と高校が併設している意味がない（高入生）
・刺激があり中だるみが防げるため（内進生）
・交流機会を増やしてほしい（内進生、高入生）
・３年から混合クラスでは団結感なく受験に向かうことになる（内進生、高入生）
・同じ学校なのに壁を感じる（内進生、高入生）

（最後まで別々のクラスを望む理由）
・授業スピードが速すぎて授業内容を定着させるのがつらかった（高入生）
・２年まで別々のクラスなら３年だけ混合クラスにする必要がない
（内進生、高入生）

（参考）内進生との交流は入学する時のイメージと同じだったか

（高入生のみ質問）

項目	高入生	
	人数	割合
もっと交流があると思っていた	62 人	**40.3%**
思っていたとおり	65 人	42.2%
思っていた以上に交流があった	27 人	17.5%

・**約４割**の高入生が「もっと交流があると思っていた」と回答

2　先行履修について（内進生）

現　　状　　中学で高校科目の数学Ⅰ、生物基礎を履修

アンケート結果

項目	内進生	
	人数	割合
大学受験の準備に役立った	67 人	**82.7%**
大学受験の準備に役立たなかった	14 人	17.3%

・先行履修は**８割**の内進生が大学受験の準備に役立ったと回答

（参考）卒業した中学校でも先行履修があった方が良かったか

（高入生のみ質問）

項目	高入生	
	人数	割合
とてもそう思う	35 人	**22.7%**
まあまあそう思う	46 人	**29.9%**
あまりそう思わない	45 人	29.2%
まったくそう思わない	28 人	18.2%

・**５割**の高入生が先行履修はあった方が良いと回答

3　先行履修について（内進生）

アンケート結果

	もっと早い方がよかった	ちょうどよい	もっと遅い方がよかった
数学Ⅰ	17人（21.0%）	58人（71.6%）	6人（7.4%）
生物基礎	9人（11.1%）	65人（80.2%）	7人（8.6%）

・「もっと早い方が良かった」「ちょうどよい」が9割あるものの、「もっと遅い方がよかった」が1割存在

（参考）高志高校の授業について（高入生のみ質問）
※高入生も2年次で高校の大部分の授業内容を修了

	とても大変	大変	余裕	とても余裕
数学	33人（21.4%）	75人（48.7%）	35人（22.7%）	11人（7.1%）
理科	20人（13.0%）	65人（42.2%）	61人（39.6%）	8人（5.2%）

4　高志学について（内進生）

現　　状　ふるさと福井に誇りを持ち、グローバルな視点を持ったイノベーターの育成を目指し6年間で3つのプログラムを実践

○ふるさと教育プログラム　博物館など施設訪問、宿泊研修
○キャリア教育プログラム　企業経営者等による授業、職場体験
○課題探究プログラム　福井のより良い将来をテーマとした探究・論文作成

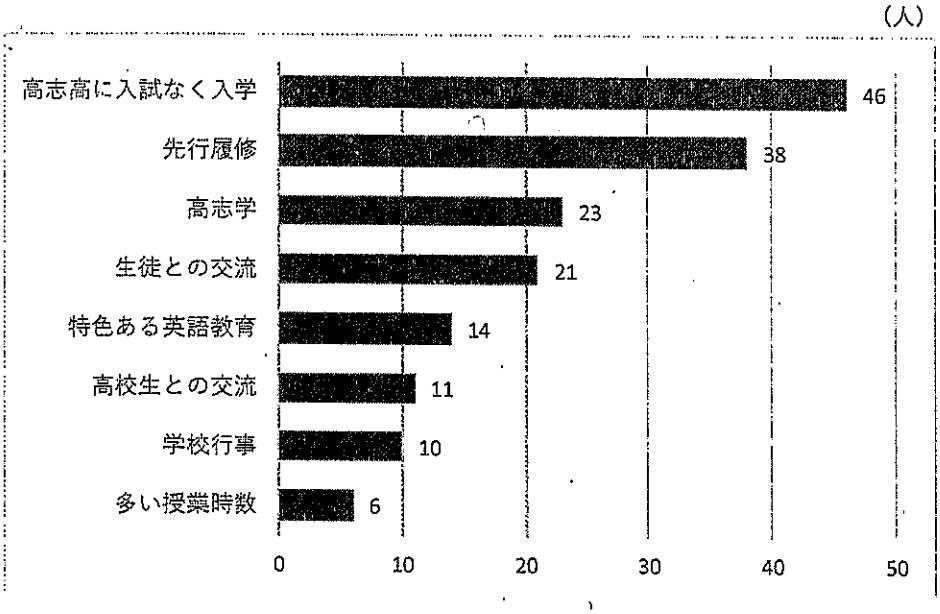
アンケート結果

内進生	とても役立った	まあまあ役立った	あまり役立たなかった	全く役立たなかった
ふるさとに対する誇り	25人（30.9%）	48人（60.5%）	5人（4.9%）	3人（3.7%）
グローバルな視野	30人（35.8%）	47人（59.3%）	3人（3.7%）	1人（1.2%）
チャレンジ精神	27人（32.1%）	54人（67.8%）	0人（0%）	0人（0%）

「あまり役立たなかった」「全く役立たなかった」と答えた理由

・グローバルな事に触れる機会が少なかった。
・ローカルなテーマを扱ったから
・日本国内でのみ考えていたから。
・ふるさとを調べる度に、ふるさとの事に対して誇りを持てなくなった。
・福井の抱える問題の多さに絶望した

5　入学の動機について（内進生 複数選択）



高志高校・中学校に関する卒業生アンケート結果（保護者）

【調査要領】

対象生徒：令和２年度高志高校卒業生、保護者
実施時期：令和３年２月
回答状況：内進生 81 人/88 人 （回答率 92.0%）　内進生保護者 82 人/88 人（回答率 93.1%）
高入生 154 人/158 人(回答率 97.5%)　高入生保護者 105 人/158 人(回答率 66.5%)

1　クラス編成について（内進生・高入生の保護者）

現　　状　１・２年生は内進生と高入生は別々クラス　３年生は混合クラス

アンケート結果

項目	内進生保護者		高入生保護者	
	人数	割合	人数	割合
１年次から混合クラス	14 人	**17.1%**	27 人	**25.7%**
２年次から混合クラス	8 人	**9.8%**	16 人	**15.2%**
今のまま	53 人	64.6%	45 人	42.9%
最後まで別々	7 人	8.5%	17 人	16.2%

・早期の混合クラス編成を希望する生徒が存在（内進生 **26.9**%　高入生 **40.9**%）

（早期の混合クラスを望む理由）
・クラスを別々にすると差別的意識を生みやすいと思うから（高入生保護者）
・様々な生徒との交流により、学校生活に意欲が持てると思うから
（内進生保護者、高入生保護者）
・入学当初は別々の学校と保護者が感じたため（高入生保護者）
・３年は受験勉強が中心。友達づくりは１、２年でやるべき（内進生保護者）
・内進生は３クラスで志望校も幅広になる。早めに混合クラスにして志望別にした方がよい（内進生保護者）

（最後まで別々のクラスを望む理由）
・２年末で内進生に追いつく必要から、数学の授業速度が速すぎると思ったから
（高入生保護者）
・中高一貫校としてのメリットが生かせると思うから（内進生保護者）
・先生の対応や言葉がけに不平等・劣等感を感じた。それなら最後まで別々の高校の生徒として扱ってもらった方がよかった（高入生保護者）

No１０　福井県高等学校教育問題協議会　答申（R2.6.8）　抜粋

Ⅲ　県立高校の魅力化に向けた目指すべき方向性

１　地域の普通科系高校の魅力化

（羽水、足羽、三国、金津、丸岡、大野、勝山、鯖江、丹生、武生東、敦賀、美方）

地域の普通科系高校においては、進学から就職まで様々なニーズに対応することが必要である。今後は、市町の参画や協力を得ながら、長い時間をかけて地域外の高校へ通学しなくても、生徒や保護者が希望する進路を地元の高校で実現できる環境を整備することが何より重要となる。特に難関大学進学については、県教育委員会が主体となり、各高校を支援していくことが必要である。

（５）中高の一貫した教育体制の充実

本県初の併設型中高一貫教育校として開校した高志中学校の第１期生が今年度末に高志高校を卒業することから実績を検証するとともに、連携型中高一貫教育校の成果や課題、地域の実情等も考慮して今後の中高連携の在り方を検討していくことが望ましい。

２　スーパー・サイエンス・ハイスクール（ＳＳＨ）指定４校の魅力化

（藤島、高志、武生、若狭）

SSH の指定を受けてから１０年以上経つ高校があるが、研究機関や大学との関係を強化しながら、これまでの取組みやノウハウを生かし、さらにステージアップしていく必要がある。高校入試の段階から秀でた才能や得意な教科を持つ生徒を確保し、進路希望に応じた環境充実を図る必要がある。

（１）多彩な教育課程等の設置

①高校入試における特色選抜の拡充等

高校入試において、秀でた才能や得意な教科、領域を持つ中学生を対象とした特色選抜を実施するとともに、科学オリンピック（数学、物理、化学、生物、地学）や情報オリンピックの対策講座を開催するなど国際大会を目指す生徒や指導教員のレベルアップを支援すべきである。近年、国の高大接続改革の流れの中で、東京大学など難関大学においても従前の推薦入試や AO 入試を導入・拡充する動きがあり、こうした動きにも対応していくことが求められる。

②多様な興味・関心や進路希望に対応し集中して学習する単位制の導入

創造的な発想ができるリーダーを養成していくため、文系理系に関わらず幅広く深い教養を教科横断的に学び、総合的で多角的な見方・考え方を伸ばしていくことが求められている。このため、生徒一人一人の多様な興味関心や進路希望に対応するため単位制を導入し、進路選択に必要な科目を選択することによる「自分だけの時間割」作成を可能とすることも考えられる。

③難関私立大学への進学支援

４校の生徒についても、国公立大学のみならず難関私立大学へ進学したいという進路ニーズもあることから、入学説明会や入試対策講座を開催するとともに、教員対象の入試研究会の開催も検討すべきである。

（２）探究的活動の深化

①研究機関や海外の高校等と連携した探究的活動の推進

JAXA や理化学研究所、東京大学等の研究機関の人材を、オンライン上でアドバイザーとして招聘し、専門的見地から助言を受けることも必要である。

また、海外の高校等と共同研究を実施し、研究成果を国外の大会でも英語で積極的に発信し外部評価を得ることが重要である。

②海外留学や海外大学への進学支援

今後は SSH で培った海外との交流経験を生かして、姉妹校の締結や ICT の活用による交流を活性化させ、海外の大学への進学等を促進させていく必要がある。

そのためにも、生徒に対し、留学や海外大学への進学に関する説明会の開催や他県でも例のない「きぼう応援海外留学奨学金」の活用を促すなど、海外大学への進学を支援していく必要がある。

No１１

福井県中高一貫教育検証委員会　検討経過

	開催日	協議事項
第１回	令和３年　６月　７日	委員紹介 併設型中高一貫教育校の成果と課題 意見交換
第２回	令和３年　７月２６日	連携型中高一貫教育校の成果と課題 意見交換
第３回	令和３年　８月２５日	中高一貫教育検証委員会 の報告書（案）

No１２

中高一貫教育校検証委員会委員名簿

氏　　名	役　　職　　等	備　　考
甲斐　和浩	あわら市教育長	連携型中高一貫教育
久保田　佳代	福井県ＰＴＡ連合会代表	
栗原　卯田子	元小石川中等教育学校校長	中等教育学校
小林　一朗	高志高等学校ＰＴＡ会長(県高等学校PTA連合会会長)	高志高等学校保護者
野尻　実加世	高志高等学校ＰＴＡ（中学校委員会委員長）	高志中学校保護者
藤岡　慎二	高等学校教育問題協議会　会長 産業能率大学教授	（座長）
村上　英明	元京都市立西京高等学校校長	併設型中高一貫校
吉川　雄二	福井市教育長	県都市教育長協議会会長

五十音順　敬称略

オブザーバー

吉田　繁	高志高等学校校長	併設型中高一貫教育
山内　悟	高志中学校校長	併設型中高一貫教育
松下　晋也	金津高等学校校長	連携型中高一貫教育
牧野　保彦	丹生高等学校校長	連携型中高一貫教育
木本　健	美方高等学校校長	連携型中高一貫教育
荒川　誠	金津中学校校長	連携型中高一貫教育
渡邉　進午	朝日中学校校長	連携型中高一貫教育
岸本　嘉宏	美浜中学校校長	連携型中高一貫教育